

# ビジネス英会話を教えて

短期大学部非常勤講師 関根 幸雄

昨年から短期大学部でビジネス英会話を担当させていただいているが、これまでの講義を振り返ると共に英語習得法に関する最近の動向についても述べてみたい。

## 1. これまでの講義を振り返って

テキストについては、短大生を対象とするため、短大生が卒業後実社会で使う英会話の場面という判断にたち、秘書の話し言葉を取り扱ったものを使用した。また、講義を進めるに当たっては、「知識言語 (langue)」としての英語に代わり「運用言語 (parole)」としての英語をめざすことを念頭に入れたつもりであったが、前期ではテキストにもとづき通り一遍の講義を行うだけで終わってしまった。この講義は前期、後期でそれぞれ終了する科目のため、前期のテキストでは分量が多かったことを反省し、後期では場面をオフィスに想定したものに変更した。そして、学校英語の表現とビジネスで使われる表現のズレ (deviation) に着眼点をおき、学校英語を基本としながらも、ビジネスでみられる英語現象を説明すべく試みた。例えば、来訪者に対し、なぜ Please sit down. ではなくて Please take (or have) a seat. となるのか、同様に What is your name? ではなくて May I have your name (,please) ? となるのか、さらに電話ではこの表現が May I ask who is calling (,please) ? と変化するのか。英語に変わりはないが、ビジネスの「場」でみられる様々な表現を学校で習ってきた英語と対比することで両者の違いを理解してもらうよう努めた。

講義内容の工夫もさることながら、英語の質にも配慮してきた。講義に先立って、家内 (アメリカ人) の協力を得てテキストの文例をチェックし、必要に応じてアメリカにいるインフォーマントにも意見を求めた。そうした過程で、前期ならびに後期で使用したテキストの中に一部不自然な表現やその場にふさわしくないとされる表現があることが指摘された。いずれの著者も日本人であり、

ネイティブ・スピーカーの校閲を受けていないようであった。こうした昨年度の経験を活かし、今年度は思い切って市販のテキストを使用しないことにした。秘書英語やオフィス英会話のテキストからポイントを抜粋・整理し教材として用いているが、学生たちにとって講義中は目に頼ることができないので耳で理解しようとしなくてはならないことになる。いきなり「音声」から入るやり方に当初戸惑いもみられたが、今では学生たちの一生懸命聞こうという姿勢が感じられるようになった。listening comprehension は取り扱いにくい分野かもしれないが、コミュニケーション能力重視という時流の中でこれまでの英語教育に欠けていた部分ではないかと思う。

## 2. 英語習得法に関する最近の動向について

実社会において英会話熱の高まる中、過去 1、2 年の間に、英語習得法に関して新しいアプローチを試みる各種の本が出版された。例えば、『科学的な外国語学習法』、『脳のメカニズムからみた英会話習得法』、『暗号解読法』、『英語独習法』、『英会話のパレートの法則』、『ウザワ式勉強法』などユニークな名称がつけられているが、いずれも著者が実践してきた成果を踏まえて提唱しているメソッドだけに訴えるものがある。これらの本を読んでキーワードとして次の 3 点が浮上してきたので、個人的なコメントを付記してみることにする。

### (1) 英語の基本ルールから逸脱しない (英文法軽視への反省)

「文法にとらわれるから話せない。話さないことには上達しない」との意見に異論はないが、英文法軽視に対する反省が英会話を指導している関係者からでていることは注目すべきであろう。流暢に話せる帰国子女の場合でも、意識が希薄でしっかりと相手のニュアンスまでを汲み取っていないため仮定法を使いこなせない人が案外多いという。

### (2) 主体的に取り組む姿勢が必要である

ある著者は「外国語を理解するには自分の努力

に頼るほかはなくなるような気持ちの緊張感を持たせることができたなら、すべてが変わってくる」と述べ、学ぶ側に意識改革を起こさせるようなアプローチを説いている。この点に関連し、『国際経営フォーラム』第4号の中で橋本光憲助教授は米国カンザス大学で実施している短期英語研修について「現地留学はそれなりの効果があることが認められる」と分析しているが、現地において実際の生活の中で英語を使うことにより学生の英語に対する意識の変化をもたらすということが背景にあるのかもしれない。

(3) 英語を習得するには3年を要する

何人かの著者が一応の目安として、3年をあげている。メソッドはお互いに異なるものの、到達目標への道のりがほぼ一致しているのは興味深い。「石の上にも3年」ではないが、一定の物事を成し遂げるために要する期間として受けとめている。

最後に、2点ほど補足してみたい。第1点は、習得する英語がハードウェアとすれば、それを運用するソフトウェアはコミュニケーション行動といえよう。英語力と共に国際社会で通用するコミュニケーション行動を平素から心がけ習慣づけて行かなければならないと思う。第2点は、『神奈川大学言語研究』第15号の「大学英語教育とその実践」の中で田久保浩平教授は「企業の実情をふまえて英語教育がなされるべきでないか」と述べておられることである。私は本年1月開催された日本商業英語学会関東支部のパネル・ディスカッションのパネリストの1人として、学会と実業界とのインターアクションの必要性について言及した。ビジネス英語という実務に直結している英語を研究しているためかもしれないが、研究が教育に活かされ、そして実社会で役立ち、またフィードバックが得られるような実学のサイクルを作り上げたいと考えている。